



ならやま里山林

阿部 和生

ならやま一帯の里山整備を始めて今日まで多くの皆さまがそれぞれの持ち味で関わっていただき整備が進んでまいりました。里山林と範囲を狭めてみますと、初期の高木公園方式の管理推進から「ナラ枯れ」発生に伴う駆除・伝播阻止の時期があり、やがて罹患木の処理に手一杯という状態が続いています。平成 29 年ひとまず「ナラ枯れ終息」となりましたが、作年度は台風被害による倒木や損壊木の処理が発生しこれまで以上に多忙な作業活動となって推移しています。

里山は人手が加わり維持されてきましたが、過日の自然災害は大きな被害をもたらしました。この克服には、現状を知り叡智を集めこれからの進め方を工夫し、現在に生かされた里山林に進めていくことが大切であろうと思います。

高橋延清博士は森林管理法の原則を記しています。

- 1.未熟な森よりも、成熟した森の方が望ましい。
- 2.適切な密度の森は、樹木がまばらに生えている森より好ましい。
- 3.種々雑多な樹木がある森は、1 種類の樹木しかない森より好ましい。
- 4.様々な高さの樹木と植物が共存している「複層林」は、高さが同じ木ばかりの「単層林」より好ましい。(複層林は成長する)。

森林に関する全国共通一律の施業方法というものは、ありません。その地その環境に適した山作りを考え試行錯誤しつつも正解を重ねてゆく作業です。先人が積み重ねてきた知恵を知り、山作りの原理原則を踏まえての方策が大切でしょう。

「ナラ枯れ・台風被害」などにより 痛めつけられた受託地里山林は、努力の施業で改善が進んでいます。ギャップの所には、クヌギ、コナラも植栽され現在も進行中です。まだこれからも植栽計画があり、元のコナラ林に全体を引き戻す事が根底にあると思います。

そこで提案です。このならやま里山林を、コナ

ラなどの薪炭・ホダ木の森に限定せず、多種・多様な落葉広葉樹の森に変えていく施業を考えてはどうでしょうか？カシナガ退治で治療を施されたこの里山林を、知恵を出しあってどのように進めるかを考えたいと思います。

遺伝子問題が生じない範囲で「奈良盆地の樹種」を参考に植栽を行ない、多彩な落葉広葉樹を主体とした里山林に変えていく方策です。ならやまは放置すれば照葉樹林化していく遷移の場所ですが、照葉樹の繁茂の時、下草が生えない現象など不都合が生じ常緑樹の広がりには適切ではありません。

生物多様性の点から見ても、水源涵養の視点からでも多彩な落葉広葉樹を植栽し「多種共存の森」に誘導してゆく施業が大切であると思います。コナラ薪炭林にこだわるのでは、やがてまたカシナガの襲来が繰り返される下地になりかねません。「カシナガの大発生という現象を、自然を単純化した人間への大自然からの警告」(山田健)と捉えるならば、この地方にある多様な樹種からなる落葉広葉樹の森に、樹種を増やしていく事が大切でしょう。

1 種類の木で構成されている森よりも 10 種類の木で構成されている森の方が、10 種類の木で構成されている森よりも 100 種類の木で構成されている森の方が強いというのは、理解できると思います。100 種類の中の 하나가駄目になっても大きな問題にはならないだろうし、その 1 種に依存する昆虫の大発生は考えられません。

自然の中の生物は、「食べる・食べられる」という生物同士のつながりです。この食物連鎖は、第一次生産者である植物群を支える土壌や土壌微生物、水環境、光環境などが整っていなければなりません。里山林全体が多様で健康な環境にあることが根本です。

一挙に樹種を増やさなくとも数種交えることでかなり高いレベルでの生態系機能が回復するという研究があります。また有用広葉樹は、将来に経済的価値をも生み出すとも考察されています。

長い時間が必要でしょうが、常緑広葉樹を除き多種共存の落葉広葉樹林に誘導しようではありませんか。